

スコットランドにおけるゴルフコース、 ゴルフクラブの実態調査

—未調査6コースについての報告—

大 澤 啓 藏

Research on the Conditions of Scottish Golf Courses and Clubs

— A Report on Six Courses Not Previously Examined —

Keizo Osawa

Abstract

The purpose of this study was to collect useful information and knowledge with respect to golf courses and clubs in Scotland so as to improve conditions under which the sport is played in Japan. With this purpose, I visited several golf courses in Scotland in 1993 and 1996 and recently carried out a third investigation from August 1-12, 2005.

This article is a report arising from the third investigation, one in which six courses not included in the previous studies are examined. A summary of the findings follows.

Many of the golf clubs have a special category of membership for youths in addition to the standard adult membership. Fees related to youth membership are exceedingly low. Two merits of youth membership are the opportunity it affords to play numerous rounds and the right to participate in many competitions. Through play and observations, I was able to ascertain that course conditions are much more difficult than they are in Japan, and special techniques and the adoption of a high-course strategy are essential for success on such links.

1. はじめに

筆者は平成5年(1993)と平成8年(1996)にスコットランド各地のゴルフコースを訪問し、コース状況やゴルフクラブの実態について調査を行い、^{1) 2) 3) 4) 5) 6)} 本学教養部紀要やゴルフ学会などにおいて報告してきた。また、平成6年(1994)4月から1年間にわたり亜細亜大学長期海外研究出張制度の適用を受け、アメリカ合衆国ワシントン州タコマ市に滞在したが、この間にもスコットランドの実態調査と同様な方法で、ワシントン州内のゴルフ事情について詳細な調査を行った。そして、合衆国におけるゴルフ事情の一端として、ワシントン州内にあるゴルフコースの実態について報告した。^{7) 8)} さらに、スコットランド、アメリカ合衆国、日本のゴルフ事情を歴史的、文化的、経済的な背景を踏まえて比較・検討を行うとともに、調査した中で特徴的なコースを詳しく紹介した著書「ゴルフの街に行く 英、米、日のゴルフ文化比較」⁹⁾を発刊した。

ところで、第二次世界大戦後の我が国におけるゴルフ場利用者数は経済成長に伴って、第一次ゴルフブーム(1958-62年)、第二次ゴルフブーム(1971-74年)、第三次ゴルフブーム(1986-90年)を経過し、微減した83年を除き右肩上がりの増加を続けた。これに伴ってゴルフコースの建設ラッシュも1~2年遅れで続いたが、急激なゴルフ人口の増加に追いつかない状況であった。¹⁰⁾しかも、造成された多くは会員制コースであり、高額な会員権で募集するコースも少なくなかった。また、ビジターのプレー料金もゴルフ場主導による料金システムが設定され、ゴルフ会員権を持たないゴルファーは、高額な料金を払ってプレーせざるを得ない状況が続いてきた。

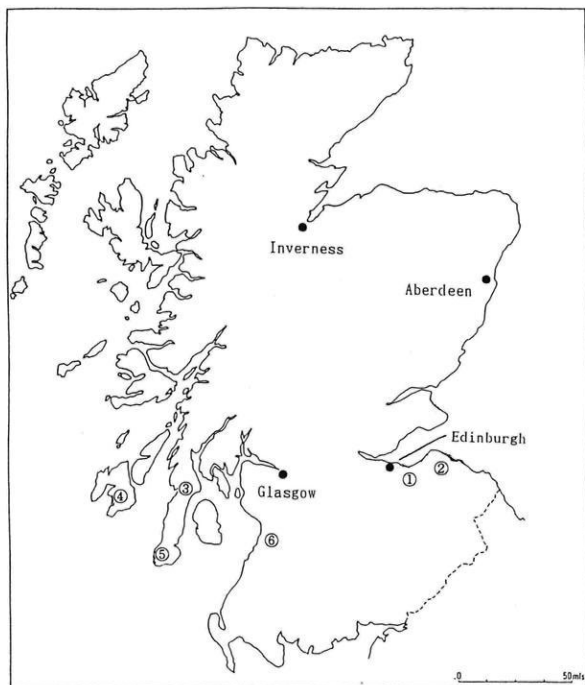
第三次ゴルフブーム期である昭和61年(1986)から平成2年(1990)はバブル経済の絶頂期であったが、一転して平成2年後半に起こったバブル経済の崩壊によって、建設業や不動産業における需要が急激に冷え込み、保有資産の価値が下落して経営状態が悪化した。また、産業界全体にみて

も倒産件数が増大するにとどまらず、金融機関は大量の不良債権を抱えて経営不振に陥る結果となった。政府は金融機関の倒産による日本経済の混乱を回避するため、銀行など金融機関再建のために公的資金の注入を行った。しかし、大量の不良債権を抱えた企業の経常利益の悪化、株価の暴落、需要の落ち込み、企業倒産件数の増加など不況が長期化する結果となった。バブル経済崩壊に続く不景気の長期化によって、庶民のゴルフ離れが一気に進行しゴルフ場の入場者数が激減した。多くのゴルフ場では入場者を確保するためビジター料金的大幅値下げや、格安バック料金の設定、曜日別料金制の設定、女性や高齢者の割引制度など様々な集客対策を行って、生き残りを賭けた懸命な経営戦略がとられた。にもかかわらず、経営不振に陥って倒産したり、大手の外国資本に買収されるゴルフ場も少なくなかった。

以上のように、バブル経済崩壊以降の社会状況とこれに伴う日本のゴルフ事情変化について述べたが、スコットランドのゴルフ事情にはどのような変化があったのだろうか。筆者は第2回調査から10年が経過した平成17年(2005)8月に、再びスコットランドにおけるゴルフ調査の機会を得た。第3回調査では、最近10年間のゴルフ事情変化について調査を行うとともに、未調査であったゴルフクラブも訪問して最新情報を収集した。調査結果のうち、スコットランドにおける最近10年間のゴルフ事情変化については、平成18年(2006)8月末に開催された日本ゴルフ学会第19回大会で口頭発表を行った¹¹⁾。本稿では、未調査であったスコットランド各地にある6コースの状況について詳しく報告する。

2. 調査方法

調査期間は平成17年(2005)8月1日から12日までの12日間である。調査を実施したコースは12コースであったが、このうち、今回初めて訪問した6コースを図1に示した。現地における調査では、訪問したゴルフ



- ① Musselburgh Links, The Old Golf Course
- ② North Berwick, Glen Golf Club
- ③ Tarbert Golf Club
- ④ The Machrie Hotel & Golf Course
- ⑤ Machrihanish Golf Club
- ⑥ Belleisle Hotel & Golf Course

図1 第3回調査で初めて訪問したゴルフコース

コースでラウンド・プレーを行ってコース状況を把握したり、多数の写真撮影を行った。また、クラブ・セクレタリー（日本のゴルフ場では支配人に相当する）、所属プロ、メンバー、プロ・ショップのスタッフなど関係者にインタビューを行うとともに、クラブ史（百周年誌）、競技日程表、内部資料など可能な限りの資料提供を受けた。さらに、ツーリスト・インフォメーション（以下、T.I）を訪れ、地区内のゴルフ関連パンフレットや書籍の収集にも努めた。

帰国後には、スコットランド観光局が毎年発行しスコットランド全体のゴルフ情報を網羅した冊子「the Official Guide to Golf in Scotland 2005」によって、現地で得た情報や資料の確認と補完を行った。また、インターネットによってスコットランド観光局「Visit Scotland」のゴルフに関する Web サイトから、スコットランド全体や各地区におけるゴルフ関連の最新情報を収集した。¹³⁾ さらに、各ゴルフクラブの Web サイトにもアクセスしてクラブ史、会員情報、競技日程、ビジター・プレー関連の事項（プレー可能日、予約方法、制限事項、プレー料金、設備の完備状況など）に関する詳細情報を収集した。

3. 結果

(1) マッセルバラ・リンクス・ジ・オールド・ゴルフコース (Musselburgh Links The Old Golf Course)

スコットランドの首都エディンバラ中心部から、車で A199 号線を東へ約 10 km 走ると、エスク (Esk) 川の河口に開けた町「マッセルバラ」に到着する。繁華街を通り過ぎ、緩やかな坂を下ってフォース湾 (Firth of Forth) の海岸に近づくと、海岸線と同高度のレビンホール・リンクス (Levenhall Links) が開け、リンクス (海岸近くにある砂地の草原) の一部にマッセルバラ競馬場がある。その競馬場中央部に 9 ホールのゴルフコースがあり、これが「マッセルバラ・リンクス・ジ・オールド・ゴルフコース」である。

歴史的にみるとマッセルバラ・リンクスはセントアンドルーズなどと同様に、公有地に自然発生的にゴルフコースが造られ、誰でも自由に無料でプレーしていた。1567 年にマリー・クイーン・オブ・スコッツ (Mary Queen of Scots) がここでプレーしたといわれるが、正式な文書として残るものは 1672 年にプレーされたという記録が最も古い。18 世紀後半からの約 150 年間は、スコットランドのゴルフ揺籃期に重要な役割を果たし

た4クラブが本拠地を置き、主にそのメンバー達がプレーをしていた。具体的には、「マッセルバラ・ゴルフクラブ (Musselburgh Golf Club)」はコースの脇にあった居酒屋「ミセス・フォアマンズ (Mrs. Foreman's)」で飲み食いしていた常連ゴルファー達を中心となって1774年に創立され、1925年までの151年間をマッセルバラ・リンクスでプレーしていた。「ジ・オナラブル・カンパニー・オブ・エディンバラ・ゴルファーズ (The Honourable Company of Edinburgh Golfers)」は1744年にエディンバラ郊外の港町リース (Leith) で創立されたが、1836年から91年までの55年間はこのリンクスを拠点にしていた。また、「ザ・ロイヤル・バージェス・ゴルフイング・ソサエティー・オブ・エディンバラ (The Royal Burgess Golfing Society of Edinburgh)」と、「ザ・ブランツフィールド・リンクス・ゴルフイング・ソサエティー (The Bruntsfield Links Golfing Society)」は1874年から95年までの21年間を本拠地にしていた。

前述のように、マッセルバラ・リンクスのゴルフコースは公有地に造られたが、1877年以前はコースを維持・管理する全ての経費は事実上オナラブル・カンパニーが支えていた。しかし、1877年になって4クラブから2名ずつの代表が出て「グリーン委員会 (Green Committee)」が創設され、各クラブのメンバー数に応じてゴルフコースの維持・管理費が寄付されることになった。しかし、オナラブル・カンパニーが1891年にマッセルバラ・リンクスから移転したため、翌92年にマッセルバラの町議会が接収して維持・管理が引き継がれた。また、ロイヤル・バージェスとブランツフィールドが1895年に去り、さらに、マッセルバラ・ゴルフクラブも1925年に移転したため、マッセルバラ・リンクスは急速に衰退してゴルフコースの存続自体も危ぶまれるようになった。しかし、リンクスの保存を切望する地元の人々などによって、「マッセルバラ・オールドコース・ゴルフクラブ」が1982年に結成され、ロイヤル・バージェス・ゴルフクラブの旧ハウスをクラブハウスとして使用することになった。今日では、公営のゴルフコースとして町が維持・管理を行いながら地元メンバー



写真1 平坦な地形に真っ直ぐ造られたフェアウェー
(マッセルバラ・オールド・ゴルフコース 4 番ホール)



写真2 海岸沿いで風の影響が強いグリーン
(グレン・ゴルフクラブ 13 番ホール)

達がゴルフを楽しむ他に、スコットランドのゴルフ史における重要なコースを喧伝して、観光客を誘致している¹⁴⁾。

マッセルバラ・リンクスのゴルフコースは7ホールから始まり、1832年に1ホールが加わり、1870年になって9ホールのコースが完成した。初期のコースも現在とほぼ同様に競馬場の中央部にレイアウトされており、正面スタンド西端に1番ホールのティーがあつて、スタンド側を東に向かって1番から4番までほぼ直線的に伸びていた。4番ホールで競馬場の東端に達したコースは5番ホールから北西に方向転換し、残りの4ホールは前半と反対方向にプレーしながら、再びスタート場所に戻るレイアウトであった。現在の1番ホールは初期の場所とは異なり、競馬コースの第3コーナー付近からスタンド側に直角に向かう134ヤード・パー3のホールから始まる。2番ホール以降は初期のコースと同様に競馬場の中央部を左回りにプレーするレイアウトであり、フラットな地形にほぼ真っ直ぐなホールが続く(写真1)。ホールの内訳はパー3が3ホール、パー4が5ホール、パー5が1ホールで合計パーが34である。また、最も長いパー4は4番ホールの431ヤードであるが、これ以外のパー4は330～360ヤードと全体的に短い。唯一のパー5も479ヤードとパー5としては短く、9ホールの合計距離も2,874ヤードである。ビジターのプレー料金は9ホールで9ポンドであつた¹⁵⁾。

このコースでは、1880年代の用具であるヒッコリー・シャフトのクラブとガッタ・パーチャ・ボール (gutta percha ball)¹⁶⁾ の複製品をレンタルして、オールド・スタイルによる9ホール・プレーと、最新用具によるプレーを比較して楽しむ企画を売り物にしている¹⁷⁾。

(2) ノースベリック、グレン・ゴルフクラブ (North Berwick, Glen Golf Club)

ノースベリック (North Berwick) はマッセルバラからさらに東に向かい、フォース湾の入り口にある北海に面した港町で、エディンバラ市民の

保養地として栄えている。エディンバラからノースベリックまでは直線距離にして約 30 kmあるが、A198 号線を使ってマッセルバラ、アバレディー (Aberlady) ガレーン (Gullane) など、いわゆる「ゴルフの街」を通過して辿るルートがある。また、A1 号線をイースト・リントン (East Linton) まで一気に走り、イースト・リントンから A198 号線をエディンバラ方面に戻る方法もある。ノースベリックには「西リンクス」と「東リンクス」があって、それぞれに 18 ホールを擁するリンクス・タイプのゴルフコースがある。町の中心部に近い西リンクスには「ザ・ノースベリック・ゴルフクラブ (The North Berwick Golf Club)」「タンタロン・ゴルフクラブ (Tantallon Golf Club)」「バスロック・ゴルフクラブ (Bass Rock Golf Club)」の 3 クラブがゴルフコースを共用している。

一方、東リンクスには「グレン・ゴルフクラブ」があるが、東リンクスの実態調査は今回が初めてである。東リンクスはローデス・リンクス (Rhodes Links) とも呼ばれており、このリンクスでのゴルフに関する公式記録は 1728 年 3 月 27 日の町議会における議事録が最古であるといわれる。グレン・ゴルフクラブ誕生の経緯は、1893 年に町議会においてリンクス一帯をフットボールなどを行う公園にする計画がなされた。しかし、途中で変更され翌 1894 年に 2,310 ヤードの 9 ホール・コースが正式にオープンした。1905 年にこのリンクスでプレーするゴルファー達が集まってクラブを組織する話がまとまり、ジェイムス・ブレイド (James Braid) の設計による 18 ホールのコースが造成され、1906 年にゴルフクラブが正式に結成された。当初は「ザ・ノースベリック・コーポレーション・リンクス・クラブ (The North Berwick Corporation Links Club)」という名称で発足したが、1930 年に「グレン・ゴルフクラブ」と改称された¹⁸⁾。

グレン・ゴルフクラブにおける会員区分は表 1 のように、男女の正会員 (Ordinary-Full)、平日会員 (Five day)、カントリー会員 (Country)¹⁹⁾、ジュニア会員 (Junior)、ソシアル会員 (Social)²⁰⁾ がある。2005 年の年会費は正会員が 380 ポンド、平日会員は 285 ポンド、カントリー会員は 304 ポンド、

18歳以下のジュニア会員が76～114ポンド、また、ソーシャル会員は30ポンドであった。入会金は正会員のみ318ポンドであり、それ以外は無料である。また、設備費（Facility Charge）として毎月2ポンドを支払うことになっている²¹⁾。

表1 グレン・ゴルフクラブの会員区分とカテゴリー別の年会費と入会金（2005年）

CATEGORY	2005 SUBSCRIPTION	ENTRY FEE
Ordinary-Full	380	318
Five day (Mon-Fri)	285	0
Country (75 miles)	304	0
Junior (under 18)	76-114	0
Social	30	0

（グレン・ゴルフクラブ・Webサイトより筆者改作）

現在のコース状況について、日本でのレギュラー・ティーにあたるイエロー・ティーから18ホール合計の距離が6,035ヤード・パー70であり、難易度を示すSSSは69と易しくない²²⁾。コース・レイアウトは1番ホールのフェアウェーが砂浜と同高度にあり、グリーン手前80ヤード付近から急激な上り傾斜地になって、約10m上った高台にグリーンがある。2番ホール以降は海岸が隆起した高台を海岸に沿って7番ホールまで行き、8番ホールから12番までは隣接したホールを行き来する。そして、13番ホールからは、海岸に最も近い側にレイアウトされたホールをクラブハウスに向かって戻ってくる。最終18番ホールは1番とは対照的に、ティー・グラウンドが高台にあって約10m下のフェアウェーに向かって打ち下ろす。ティー・ショットを打ったプレーヤーは急坂を下りて、第2打は砂浜と同高度のフェアウェーからクラブハウス前にあるグリーンに向かってショットする。

グレン・ゴルフクラブのSSSは69と述べたが、それは天候が良好で無風に近い日の難易度である。コース上は風を遮る樹木やマウンドがなく海からの風が直接コースを吹き抜けるため、荒天の日など強風下のプレーで

は想像を絶するほどの難しさになるだろう。特に、海に向かって約 10m 打ち下ろす 9 番ホールの 202 ヤード・パー 3 では風の強さによって飛距離が大きく変わるため使用クラブの選択が難しく、ミス・ショットした場合にはボールの流され方も極端である。また、13 番ホール・パー 3 は 134 ヤードと距離は短い、海岸の直近ある狭いグリーンに海岸線に沿って打ち下ろすため、横風の影響を極めて強く受けることになり、プレーヤーには大きなプレッシャーのかかるホールである (写真 2)。

グレン・ゴルフクラブにおけるビジター料金は平日の 1 ラウンドが 30 ポンドで 1 日券が 43 ポンド、週末の 1 ラウンドは 42 ポンドで 1 日券は 60 ポンドであった。

(3) ターバート・ゴルフクラブ (Tarbert Golf Club)

スコットランド中部の西海岸でストラスクライド (Strathclyde) 地方のアーガイル (Argyll) 地区にあり、南に垂れ下がったキンタイア半島 (Kintyre Peninsula) 中央部の最もくびれた部分にある小さな町がターバートである。ターバートは西ターバート湾 (West Loch Tarbert) とフィネ湾 (Loch Fyne) の両方に面しているため天然の良港であり、かつてはニシン²³⁾ 漁で繁栄したが現在は漁業が不振で観光に依存するといわれる。アイラ島に渡るケナクレイグ (Kennacraig) のフェリー埠頭に約 7 km と至近距離にあって、フェリー予約やアイラ島での宿泊予約はターバートの T.I で行うことができ、アイラ島観光の基地となっている。

ターバート・ゴルフクラブはキャンベルタウンに向かう A83 号線を町から約 2 km 南下し、内陸側に約 1 km 入った丘陵地に位置している。クラブは 1930 年代初めに創立され、傾斜地に造られた 9 ホールのコースを持っている。居合わせたメンバーに対するインタビューでは会員の多くが地元住民であり、現在のメンバー構成と人数は成人男性会員が約 150 名、女性会員が 30 名、シニア会員が約 80 名、ジュニア会員が約 60 名、他にカントリー会員もいると話していた。1 番ホール・ティーの後方には無人のス

ターゲット小屋があって、中には料金箱、チケット、封筒、スコアカード、クラブ紹介パンフレットが置かれている。ビジターはチケットの半券とプレー料金（9ホールでも18ホールでも10ポンド）を封筒に入れて料金箱に投函し、プレーを開始する。田舎町にあって地元住民が主なメンバーで運営するゴルフクラブでは、平日はスタッフが居ないところが多く、自己申告によってプレー料金を払う。このような方式はスコットランドでは珍しい事ではなく、同様な例について第1報で詳しく紹介している。

コース状況はパー4が6ホール、パー3が3ホールの9ホールからなり、合計パー33で総距離が2,230ヤードで、同じコースを2周して4,460ヤード・パー66（SSSは63）という小規模コースである。レイアウトは最も低い場所に真っ直ぐな1番ホール（264ヤード・パー4）があって、2番以降は丘陵の斜面をジグザグに上って行き、7番ホール（324ヤード・パー4）がコース内で最も高い場所にある。8番ホールは128ヤード・パー3であるが、グリーンは約20m打ち下ろした場所にあり、一気に1番ホールと同じ高度に戻る。最終9番ホール（279ヤード・パー4）は細い舗装道路を挟んで1番ホールと逆方向に戻ってくる。9番のグリーン脇には小さな木造平屋建のクラブハウスがあり、平日は閉鎖されている。「週末にはメンバーが寄り集まってビリヤードやカードで楽しむ」とインタビューに応じたメンバーが語っていた。

(4) ザ・マックリー・ホテル・アンド・ゴルフコース (The Machrie Hotel & Golf Course)

アイラ島唯一のゴルフコースが「ザ・マックリー・ホテル・アンド・ゴルフコース」である。アイラ島はキンタイア半島西側の大西洋に浮かぶ島であり、グラスゴーからは列車とフェリーを乗り継いで約5時間半で到着する。島に渡るフェリーは前述のケナクレイグ埠頭から約2時間の乗船で、ポート・エレン (Port Ellen) またはポート・アスカイグ (Port Askaig) に到着する。また、小型飛行機を利用する方法もある。アイラ島にはウイス

キー蒸留所が7ヵ所あり、島内で生産されるシングルモルト・ウイスキーは「アイラ・モルト」と呼ばれ有名である。²⁴⁾ウイスキー造りは島の重要産業であると同時に、ウイスキー蒸留所を見学して巡る「ウイスキー街道巡り (Whisky Trail Tour)」も名物の1つになっており、夏季には多くの観光客が訪れる。アイラ島にはポート・エレン、ポート・アスカイグ、ボーマア (Bowmore) などの町に小規模ホテル、ゲスト・ハウス、B&Bなどの宿泊施設があり、島に渡った観光客を収容している。

ゴルフコースを持つマックリー・ホテルはポート・エレンから約6km離れたラガン湾 (Laggan Bay) に面したリゾート・ホテルである。このホテルにはコンドミニウム15棟と2階建ての本館からなり、本館には16室のベッド・ルーム、ダイニング・ルーム、ラウンジ、ビリヤードやカードを楽しむ娯楽ルーム、ゴルフ用品販売とプレー受付を行うプロ・ショップなどがある。ゴルフコースは海岸近くにレイアウトされたリンクス・タイプの18ホールで、オリジナルのコースは1891年にウイリー・キャンベル (Willie Campbell) の設計によって造られた。1970年代後半にドナルド・スティール (Donald Steel) によって一部が変更され、現在のコースはイエロー・ティーから5,903ヤード・パー71でSSSは68である。²⁵⁾

コース上は海から常に強い風が吹いており、ショットを少しでも曲げると風に流されて深い草原に打ち込み紛失球になる危険性が高い。このため、向かい風のティー・ショットでは、3番ウッドや5番ウッドで低い弾道の球筋を打つなど風の影響を受けにくいショットが必要である。風の強いリンクス・コースでは、リンクス特有のショットとクラブ選択が重要であり、独特なコース戦略が要求される。コースの中で最も長いパー4は14番ホールの408ヤードであるが、これ以外のパー4は300～380ヤードと一般的に距離は短い。しかし、幾つかのホールではグリーン手前にマウンドがあったり深い窪地の底にグリーンがあって、ホール・カップの位置を示す旗竿がまったく見えない。このため、グリーンを狙う100ヤード前後の短いショットでも距離感の把握が難しく、大きく打ち過ぎるとグリーン後方

の茂みに入って紛失球になる場合も多く、グリーン近くからのショットも油断できない。

マックリー・ゴルフコースは基本的にはホテル宿泊者向けであるため、宿泊者の1ラウンド料金は42ポンド、1日券52ポンドに対し、非宿泊者は1ラウンド47ポンド、1日券65ポンドと、やや高めに設定されている。ザ・マックリーのようにホテル滞在中に気軽にプレーが楽しめるよう宿泊者専用コースを擁して観光客を誘致するリゾート・ホテルはスコットランドでは比較的多く見ることができる。その代表が「グレン・イーグルス」と「ターンベリー」であり、一流ホテルに宿泊して超一流のゴルフコースでプレーすることを楽しみに世界各国から訪れる観光客が多い⁹⁾。

(5) マクリハニッシュ・ゴルフクラブ (Machrihanish Golf Club)

キンタイア半島を走る主要道路 A83 号線をターバートからさらに南下すると、南端近くのキャンベルタウン (Campbeltown) に到着する。キャンベルタウンは 19 世紀中頃にはウイスキー生産とニシン漁の港として栄えた町だが、1920 年代になると 34 あったウイスキー蒸留所の多くが閉鎖され、漁業もさびれたといわれる²⁶⁾。

古めかしさを感じさせるレンガ造りのビルが多い市街地から、B843 号線を西に約 9 km 走ると大西洋に広がるマクリハニッシュ湾に出る。マクリハニッシュ湾に沿ってレイアウトされたリンクスコースが「マクリハニッシュ・ゴルフクラブ」の 18 ホールであり、その内陸側に 9 ホールの「ザ・パンス・コース (The Pans Course)」を持っている。マクリハニッシュ・ゴルフクラブは 1876 年 3 月 11 日にキャンベルタウンのホテルでクラブ創立のためミーティングが開かれたが、降雪のため 3 月 20 日になってようやくクラブ創立後最初のプレーが行われた。当初は「ザ・キンタイア・ゴルフクラブ (The Kintyre Golf Club)」という名称であったが、後年「マクリハニッシュ・ゴルフクラブ」となった。このリンクスではクラブ創立以前の 1871 年頃からプレーされていたといわれ、初期のコースは 10 ホールで

あったが1876年11月に12ホールとなった。クラブ創立3年後の1879年にセントアンドルーズからオールド・トム・モリス (Old Tom Morris) を招聘し、モリスのアドバイスによって西側に敷地を拡張して18ホールのコースを完成させた²⁷⁾。

クラブ・セクレタリーへのインタビューで提供された内部資料によると、2005年の会員区分と会員数は表2のとおりであった。会員区分は正規会員 (Ordinary Members) 以外に、生涯会員 (Life Members) やカントリー会員 (Country Members)、ハウス会員 (House Members)、名誉会員 (Honorary Members)、シニア会員 (Senior Members) がある。そして、少年会員と少女会員 (Boy Members、Girl Members) の区分もあって、合計で約200名ものジュニア・ゴルファーが会員になっていた。このように、ジュニアからシニアに至る幅広い年齢層のゴルファーによって会員が構成されており、地域に根ざしたゴルフクラブの様相が推察できた。

表2 マクリハニッシュ・ゴルフクラブの会員区分とカテゴリー別人数 (2005年)

CATEGORY	NUMBER
Ordinary Members	460
Life Members	10
Country Members	271
House Members	41
Honorary Members	4
Senior Members	55
Boy Members	157
Girl Members	39
Lady Members	130
TOTAL	1,167

(Scottish Golf Union Limited Annual Per Capita Charge 2004-2005より筆者改作)

コース状況は多くのリンクス・コースと同様、海岸線に沿って前半の9ホールはクラブハウスから遠ざかり、後半9ホールで戻ってくるレイアウトになっている。1番ホール (423ヤード・パー4) はマックリー湾の砂浜越えに打つ難易度の高いティー・ショットが要求され、スコットランドで



写真3 フェアウェーある波状のアンジュレーション
(マクリハニッシュ・ゴルフクラブ 15番ホール)

「最良の1番ホール」として選定された名物ホールである。続く2番ホールから8番までも海岸線に沿って東に向かい、9番は海岸線と直角に内陸側にレイアウトされている。後半の9ホールは内陸側を前半と逆方向に1番ホールに向かって戻る。各ホールは広いリンクスの草原に点在し、隣接するホールとの間は自然状態で草丈の長いイネ科の植物などが繁茂している。このため、フェアウェーに正確にショットできず草原に入ったボールはほとんど発見不能である。しかも、常に強風が吹いているため少しでもミス・ショットすると、打球の曲がり方も急激で草原の彼方に消える。遠くの丘陵地には数十機の風力発電用風車が設置されており、コース周辺は強風地帯であることが推察できる。

砂地のフェアウェーは固く締まり芝生も薄いいため、打球は良く転がり距離を稼ぐ事ができる。しかし、元の地形を大きく改造せず自然に近い状態でコースが造られているため、フェアウェーには波状の起伏が無数にあって転がったボールは低い場所に止まる(写真3)。このため、次打はヒダ状の底にある難しい状況からのショットになる。また、グリーンまで80ヤ-

ド前後のアプローチ・ショットでも、固いフェアウェーからは高弾道のショットが困難であり、低弾道でグリーン手前 30 ヤードあたりから転がしてホール・カップに寄せるような高度な技術と的確な距離感が要求される。コース全長はイエロー・ティーから 6,001 ヤード・パー 70 で SSS は 69 と易しくない。さらに、絶え間ない強風、ひだが多く狭いフェアウェー、固くて速いフェアウェーとグリーンなど、日本ではめったに経験できないコース条件が重なっているため、実際にプレーしてみると難易度より遥かに難しく感じられた。このコースで良いプレーをするには、難しい状況に対応したコース戦略と日本ではほとんど使用しない高度なショット技術が要求される。ビジターのプレー料金は平日 1 ラウンドが 35 ポンド、1 日券は 55 ポンドであり、週末 1 ラウンドも 35 ポンドで平日と同様だが、1 日券は 75 ポンドと割高である。

(6) ベルリースル・ホテル・アンド・ゴルフコース (Belleisle Hotel & Golf Course)

ストラスクライド地方南部で大西洋側に面した町々の海岸線に広がるリンクスでは古くからゴルフが行われており、ロイヤル・トルーン (Royal Troon)、プレストウィック (Prestwick)、ターンベリー (Turnberry) といった全英オープン選手権が開催された一流のゴルフコースが続いている。「ベルリースル・ゴルフコース」はエア (Ayr) 市郊外のシーフィールド (Seafield) 地区にあるリゾート・ホテルに付随したゴルフコースである。エア市はサウス・エアシャー (South Ayrshire) 最大の町で、国民的な詩人口バート・バーンズ (Robert Burns) ゆかりの地でもあり、観光産業に大きく依存するスコットランド有数のリゾート地である²⁸⁾。

ベルリースル・ゴルフコースはリゾート・ホテルに付随したパブリック・コースであるが、プロ・ショップでのインタビューで得た情報では「ベルリースル・ゴルフクラブ (Belleisle Golf Club)」「タム・オシャンター・ゴルフクラブ (Tam O' Shanter Golf Club)」「シーフィールド・ゴル

フクラブ (Seafield Golf Club) の3クラブがホーム・コースとしてプレーしているとのことであった。各クラブの会員について、「ベルリースル・ゴルフクラブ」は男性、女性、ジュニアの会員がおり合計約250名である。「タム・オシャンター・ゴルフクラブ」は成人男性のみで約200名の会員がいる。「シーフィールド・ゴルフクラブ」には男性と女性の会員が合計約120名いるとのことであった。各クラブの競技会はほぼ毎週開催されており、3クラブの対抗戦が2年毎に開かれていると話していた。

ゴルフコースはホテルが擁する広大な敷地に、ジェイムス・ブレイドのデザインによって1927年に造られた。ほぼ平坦な土地に造られた庭園風のコースで高木が茂り、日本でもよく見かけるゴルフコースの風景である。レイアウトは1番ホール(449ヤード・パー5)、2番ホール(455ヤード・パー5)と短いパー5からスタートし、3番ホール(140ヤード・パー3)の後に、400ヤード近いパー4が3ホール続く。その後は短いホールで、前半の9ホール合計は2,993ヤード・パー36である。後半はパー3のホールが3つあるため合計パーは35であるが、4つのパー4のうち16番が393ヤードで最も短く、これ以外の3ホールは400ヤードを超えるため合計距離が3,054ヤードと、前半9ホールに比べて後半9ホールは難易度の高いコース・レイアウトになっている。イエロー・ティーによる18ホールの合計距離は6,047ヤード・パー71で、SSSは70である。ビジターのプレー料金は、平日1ラウンドが20ポンドで1日券が29ポンドであり、週末1ラウンドは25ポンドで1日券が33ポンドである。

4. おわりに

今回のゴルフ調査で訪問したゴルフコースはスコットランドの東海岸と西海岸に面した町に隣接し、スコットランドでも古くからゴルフがプレーされてきた歴史のあるリンクス・コースが多かった。第1回、第2回で調査を実施したコースも含めて合計12のゴルフコースを訪問したが、この

うち、本稿では未調査であった6コースの状況について詳しく報告した。

第3回調査で得られた資料や情報を整理した結果において特筆すべきは、まず第1にスコットランドの多くの地域やゴルフクラブにおいて、子供に対するゴルフ環境が十分に配慮されており、幼少時代から気軽にゴルフに親しみながら技術を磨くことができることである。スコットランドでは、多くのゴルフクラブに「ジュニア会員」の区分があって少年時代からクラブに入会でき、安い年会費で大人と同様に打撃練習やプレーが頻繁にできる。近年は日本においてもジュニア・ゴルファーが増加しており、成人後にプロとして活躍する選手も目立ってきている。沖縄県や熊本県など一部の地域では打撃練習やコース練習、指導者などの環境が整備され、組織的なジュニア・ゴルファー育成の取り組みが行われて、この地域から優秀な選手が多く育っている。しかし、他の地域では練習場所や経済的に恵まれたジュニアが個人的に行ったり、ゴルフ部がある中学校や高校のクラブ活動として行っているのが一般的な状況である。今後、日本におけるゴルフ発展には次世代を担うジュニア・ゴルファーの育成は重要であり、ジュニアに対する環境整備が全国的に普及する必要がある。その一環として例えば、ゴルフ場に子供料金が設けられ、親と一緒に来場する場合には格安料金でプレーできるといった優遇措置があればプレーの機会も増加する。さらに進んで、スコットランドのゴルフクラブと同様に「ジュニア会員」の制度が設けられ、ジュニアに対する練習環境の改善と経済的負担の軽減がゴルフ場の協力によって成されるならば、格段にジュニア・ゴルファーが増加すると思われる。

ゴルフのジュニア教育は単に優秀な技能の選手を育成してプロ選手として活躍させることでなく、ゴルフを学ぶ中でのエチケット教育や社会性の育成など人間性の教育として本来の意義があると思われる。また、生涯スポーツとして愉しむ素養を育成することも重要である。スコットランドでは地域に根ざすゴルフクラブにおいて競技会や行事に参加し、様々な年代や職業の会員達と接する中で、このような教育が自然の形で行われている

と今回の調査によって推察された。

第2にコース状況に関して、レイアウト、ホール距離、難易度などは資料やインターネットによってある程度の把握は可能であった。しかし、現地のコースでプレーしなければ理解できない内容も非常に多くあった。特に、リンクス・コースではレイアウトばかりでなく、フェアウエーやグリーンアンジュレーション、固い土質によるボールの転がり具合、ラフの状況、風の強さや気温変化などは資料だけでは把握できない。今回、多くのリンクス・コースでのプレーによって実感できたことは、日本のコース状況と異なる点が多々あり、日本でプレーする際の技術や戦術では通用しない場面が多かった。リンクス・コースで良いプレーをするためには、リンクス・コース特有の状況に対応した高度なショット技術と独特なコース戦略の修得が不可欠であることが理解できた。

[付記]

本研究は、平成17年度亜細亜大学短期海外出張制度の適用を受け、現地調査を実施した。

注および参考文献

- 1) 大澤啓藏 (1994) 「スコットランドのゴルフコース、ゴルフクラブの実態調査——第1報 ゴルフコースについて——」 亜細亜大学教養部紀要第49号 150-162.
- 2) 大澤啓藏 (1995) 「スコットランドのゴルフコース、ゴルフクラブの実態調査——第2報 ゴルフクラブについて——」 亜細亜大学教養部紀要第52号 243-256.
- 3) 大澤啓藏 (1997) 「スコットランドにおけるゴルフ実態調査——第1報 コースの状況について——」 日本ゴルフ学会第10回大会 (発表抄録集 46-47.)
- 4) 大澤啓藏 (1998) 「スコットランドにおけるゴルフ実態調査——第2報 地域社会とゴルフ——」 日本ゴルフ学会第11回大会 (発表抄録集 31-32.)
- 5) 大澤啓藏 (1998) 「スコットランドにおけるゴルフ実態調査——第3報 ビジターのプレーについて——」 日本ゴルフ学会第11回大会 (発表抄録集 33-34.)
- 6) 大澤啓藏 (1999) 「スコットランドにおけるゴルフ実態調査——第4報 ク

- ラブハウスとクラブライフについて——」日本ゴルフ学会第12回大会（発表抄録集 37-38.）
- 7) 大澤啓藏（1997）「アメリカ合衆国ワシントン州におけるゴルフ調査——日本および、スコットランドの状況との比較——」亜細亜大学教養部紀要第55号 153-170.
 - 8) 大澤啓藏（2000）「スコットランドにおけるゴルフ実態調査——第5報 アメリカ合衆国および、日本との比較について——」日本ゴルフ学会第13回大会（発表抄録集 36-37.）
 - 9) 大澤啓藏（2004）「ゴルフの街を行く 英・米・日のゴルフ文化比較」春風社
 - 10) 田中義久（1992）「ゴルフと日本人」 pp.97-99. 岩波書店
 - 11) 大澤啓藏（2006）「スコットランドにおけるゴルフ実態調査——第6報 最近10年間の状況変化——」日本ゴルフ学会第19回大会（発表抄録集 42-43.）
 - 12) Visit Scotland 「the Official Guide to Golf in Scotland 2005」 Pro-Sports Promotions Ltd
 - 13) 「スコットランド観光局（Visit Scotland）・ゴルフ・Web サイト」 <http://golf.visitscotland.com/>
 - 14) 「マッセルバラ・リンクス・Web サイト」 <http://www.musselburgholdlinks.co.uk/history/clubs.html>（2006.03.01. 閲覧）
 - 15) 平成17年（2005）8月当時の為替レートでは、1ポンド約200円であった。
 - 16) ゴルフ・ボールは古くは木を削って丸くしたものが使われたといわれるが、15世紀頃になると馬や牛の皮を袋状に縫った中に羽毛を詰めて丸くした「フェザー・ボール」が使われるようになった。しかし、フェザー・ボールは手作りで非常に高価なため富裕階級人しか使えなかった。1840年代にセントアンドルーズに住むジェイムス・パターソン（James Peterson）が、インドから送られた荷物の梱包に使われていた「ガッタ・パーチャ」を熱湯で軟らかくし手で丸めた試作ボールを使用したところ非常に良く飛んだ。ガッタ・パーチャはマレー半島でとれる樹脂を乾燥させたゴム状の梱包材である。試作ボール完成から間もなく、鑄型にはめて作られた「ガッタ・パーチャ・ボール」が商品化されると、破損しにくく耐久性にも優れ、フェザー・ボールに比べ半分以上の価格だった。このため、これを使ってプレーするゴルファーが急増し、1880年代から1900年初頭に起こったスコットランドのゴルフ・ブームの大きな要因となっている。
 - 17) East Lothian Council 「Musselburgh Links The Old Golf Course」
 - 18) 「グレン・ゴルフクラブ・Web サイト」 <http://www.glengolfclub.co.uk/>

- history.htm (2005.10.22. 閲覧)
- 19) 「カントリー会員」とは、クラブから離れた地域に住む会員のことである。スコットランドでは会員区分によって年会費が異なるクラブが多く、カントリー会員は地元会員よりプレー頻度が少ないなどの理由から年会費が減額される場合が多い。クラブによって距離は異なるが、グレン・ゴルフクラブの場合は75マイル(約143km)以上離れた会員をカントリー会員としている。
 - 20) 「ソーシャル会員」とは、プレーはしないがクラブ行事のみ参加する会員であり、多くのクラブが会員区分として設けている。スコットランドのゴルフクラブでは、競技会だけでなく夕食会、新年会、ダンス・パーティー、クリスマス・パーティーなどを公式行事として位置づけており、ゴルフクラブが地域の社交場として機能を果たしていることが伺える。
 - 21) 「グレン・ゴルフクラブ・Web サイト」<http://www.glengolfclub.co.uk/application.htm> (2006.03.22. 閲覧)
 - 22) SSSはゴルフコースの難易度を表す数値である。日本ではコース・レート(Course Rate)という難易度の査定基準を用いているが、スコットランドでは「スタンダード・スクラッチ・スコア(Standard Scratch Score)」を用いている。SSSの定義は「スクラッチ・プレーヤー(ハンディキャップ0のアマチュアとしてはトップ・クラスのゴルファー)が夏のコンディションの良い時期に、メダル・ティー(バック・ティー)からラウンドした場合に期待されるスコアである」とされており、内容的にはコース・レートとほぼ同様である。そのコースのパーに対してSSSの数値が低いほど易しく、パーと同等程度ならやや難しく、SSSがパー以上だと一般のアマチュアにとっては、非常に難しいコースといえる。
 - 23) 木村正俊、中尾正史編著(2006)「スコットランド文化事典」p.161 原書房
 - 24) 土屋 守(2002)「シングルモルトを愉しむ」光文社
 - 25) 「The Machrie Hotel & Golf Course Yardage Booklet」(2003) Eagle Promotions Ltd
 - 26) 前掲23)、「スコットランド文化事典」pp. 141-142.
 - 27) D. J. McDiarmid (1976)「100 Years of Golf at Machrihanish 1876-1976」(百周年誌・非売品)
 - 28) 前掲23)、「スコットランド文化事典」pp. 132-133.